

盲導犬候補 癒やし役に

目の不自由な人を助ける「盲導犬」。専門の訓練を受けて育てられるが、そのうち盲導犬になれるのは基準をクリアした3割と4割という「狭き門」だ。盲導犬になれなかった「候補生止まり」の犬は家庭に譲られることが多いが、兵庫県伊丹市の介護施設では、利用者をケアする「セラピー犬」として活躍している。盲導犬の訓練を受けた犬は人への関心が高く、突然の事故などに落ち着いて対応できるという、介護分野での可能性に注目が集まっている。

(中井芳野)

盲導犬 全国にある盲導犬訓練所で約1年間の訓練を受け、3段階の試験を合格すれば盲導犬になることができる。訓練所ごとの認定で、試験も各訓練所で異なるが、試験官と一緒に駅ホームなどを回り歩道や階段の段差を教える▽曲がり角で止まる▽障害物を避ける▽ができるかどうかを確認したりする。盲導犬として認定を受ければ、利用者の性別や体形などに応じた犬の斡旋(あっせん)が行われ、利用者が暮らす地域でさらに訓練した後、正式に盲導犬として活動する。

訓練経験生かし「セラピー犬」転身



セラピー犬「ハート」との触れ合いで笑顔をみせる利用者ら—兵庫県伊丹市

「はーちゃん、おいしいおやつあるよ」
同市の通所介護施設「アイリーデイサービス」。利用者者の永谷米子さん(84)は、雄のラブラドルレトリ

バー「ハート」(2歳)に食べ物をやったり、頭をなでたりするなどして触れ合いを楽しんでいた。
永谷さんは認知症などを患い、2年前から自宅に閉

じこもるようになった。心配した息子の栄一さん(55)の勧めで施設の利用を始め、ハートと出合った。すると、「はーちゃんに会える」と施設訪問を待ち望むように。さらに、買い物などにも積極的に出て行くようになったという。

ハートは盲導犬の訓練を1年間受けたが試験を通過できなかった犬。同施設が今年1月に開業するのに際し、他施設で盲導犬になれなかった犬が癒やしを与えている姿を見て、導入を決定。中部盲導犬協会(名古屋)から借り受けた。

施設長の森一美さん(55)は「盲導犬として大切に育てられたハートなら、利用者者に寄り添い、癒やしや意欲向上の手助けができる」と話す。

同協会によると、平成28年度の1年間に新たに盲導犬となったのは全国で約130頭。一方、性格や健康面などを考慮して「適性が合わない」と判断された「候補犬」はその2倍以上いる。ただ、盲導犬になれなかった犬も、訓練を受けたいことで「人の感情を察するのがうまい」「何事

にも落ち着いて対応できる」など、それぞれ得意分野を持つことが多いという。

その特性を盲導犬以外の方法で社会に役立てようという試みは各地で始まっている。同施設以外でも、埼玉県の医療機関では、日本盲導犬協会から派遣された犬との触れ合いで患者のメンタルケアやリハビリへの意欲向上を目指す取り組みを行っている。

中部盲導犬協会の担当者「盲導犬になれなかった犬の転身事例はまだ少ない。セラピー犬の頭数を増やすなど、より多くの人と触れ合う機会をつくってほしい」と話している。

